



第30回

あいち国際女性映画祭 2025

－ 合同記者会見レポート －

2025年9月11日ー15日に開催される「第30回あいち国際女性映画祭2025」（世界初公開2作品、日本初公開5作品、愛知初公開7作品を含む招待作品24本、フィルム・コンペティション作品18作品を含めた全42作品をウィルあいちとミッドランドスクエアシネマ名古屋にて上映）の開幕前日に名古屋市東区ウィルあいち3階大会議室にて合同記者会見が執り行われた。

出席ゲストは今映画祭2025アンバサダーの三島有紀子監督『繕い裁つ人』、ハ・ミョンミ監督『済州島四・三事件 ハラン』、ヤン・ヨンミ プロデューサー『同』、キム・ヒャンギ『同』（俳優）、浜野佐知監督『金子文子 何が私をこうさせたか』、菜葉菜『同』（俳優）、熊谷博子監督『日々 福島のルワンダカフェから』、谷口未央監督『長浜』の8名。あいち国際女性映画祭に参加する意義や今回の出品する自作への思いを語った。

“しつこく” 続けることが大事

大村秀章愛知県知事より映画祭開会の挨拶ー「このウィルあいち1996年にオープンしたときに記念行事として本映画祭が開催され、30回という節目を迎えました。現在、日本で開催される国際女性映画祭は愛知だけです。これからも“しつこく”やってまいりますので、ご登壇の皆様も“しつこく”お付き合いくださいますようお願いしたいと思います」と語った。

30年目でたどり着いたあるひとつの地位

次に主催者からの挨拶。公益財団法人あいち男女共同参画財団 武田晃理事長は「今回は30周年ということで三島有紀子監督にアンバサダーをお願いいたしました。またフランスのクレティユ国際女性映画祭や韓国のソウル国際女性映画祭と連携するなど例年以上に盛りだくさんの企画をご用意しております」。そして木全純治ディレクターは「今年は世界初公開が2本、日本初公開が5本、計7本の映画が日本で初めて紹介することができます。クレティユやソウル国際女性映画祭との連携もあり、世界の女性監督の作品が一堂に公開できることが今回の特徴です。また他の連携企画には『国際芸術祭あいち2025』（9月13日～11月30日開催中）のフル・アル・カシミ芸術監督推薦映画の上映や、今映画祭で上映する作品の中からセレクトしたものを『東京国際映画祭2025』（10月27日～11月5日）で連携上映するなど、あいち



国際女性映画祭が世界の映画祭の中で、あるひとつの地位の確立にたどりつけた」と感慨深く述べた。



合同記者会見に登壇した監督・俳優と大村秀章愛知県知事（前列右から2人目）

あいち国際女性映画祭2025 サイト

ゲスト監督・俳優が語る出品作への思い

登壇した監督や俳優のみなさんが「あいち国際女性映画」との関わりや、出品した作品についての熱い思い、撮影時の苦労や裏話などを語った。



三島有紀子監督

三島有紀子監督『繕い裁つ人』・・・・・・・・・・・・・・・・

わたしを「アンバサダー」に指名いただいたきっかけはパンデミック時に作った『東京組曲2020』『一月の声に歓びをきざめ』を本映画祭で上映させていただいたことでした。わたしがその時に感じたことと、そして今回の30周年の上映プログラムを見て感じたことそのものが今だに女性映画祭が必要であることを非常に浮き彫りにしていると思いました。作品のラインナップを見ていただければ、なぜこの映画祭が必要であるかわかっていただけたと思います。

今回の出品作『繕い裁つ人』は10年前から企画して実現した映画です。丁寧に作り、丁寧に来ていただけることをテーマにしています。映画が消耗品にされないよう、大切に丁寧に映画を作り、そして観客の皆様に丁寧に観ていただき100年後も残る作品を作っていけたらと思います。



浜野佐知監督

浜野佐知監督『金子文子 何が私をこうさせたか』・・・・・・・・・・・・・・・・

わたしが『金子文子』を撮ろうと思ったきっかけは、2019年に日本で公開された韓国映画『金子文子と朴烈』を観に行った時。金子文子がパク・ヨルとセットになり、パク・ヨルを愛しいっしょに死のうと望んだ女性というラブストーリーになっていました。わたしは「こんなの金子文子じゃない」と思い、これが世界中にバラ撒かれるんだったら「わたしが金子文子を撮ろう」と決心しました。金子文子をひとりの人間として、ひとりの女性としてもう一度今の時代に蘇らせたいという思いでした。大逆罪によって検束され死刑判決を受けたのち、1926年に栃木女子刑務所に収監され自死するまでの121日間を描いた。そして文子を演じてもらうのは菜葉菜さんしかいないと思いました。



菜葉菜

菜葉菜（俳優）

浜野監督はゆっくり丁寧に誰よりも熱い、強い思いで映画を作られています。その思いにわたしも乗っかり、監督の信頼に応えられるよう、役者としてこういった作品に出会えて演じさせていただくことに幸せを噛み締め、全力で金子文子を演じることができました。



熊谷博子監督

熊谷博子監督『日々 福島のリワンダカフェから』・・・・・・・・・・・・・・・・

来年（2026年）で東日本大震災の原発事故から15年目となります。震災後の2013年から福島原発周辺の帰還困難区域の線量が高い中を防護服を着て恐怖に怯えながら記録したり、その地域から避難した人々を約10年撮り続けやっとそれが映画として完成。撮影中、浪江町の方たちから二本松の仮設住宅でルワンダの女性が月に一回お茶会を開いているという話を聞き通うようになりました。マリールイズという女性ですが、彼女はルワンダの大虐殺を逃れ、奇跡的に日本に来て福島で暮らしていました。福島に来て助けられたと言う思いから、震災後、彼女だからできる声掛けや援助を避難者にしていたのです。ウクライナやガザなど世界中で避難しなければいけない人たちがたくさんいます。この映画を観てそういったことも感じていただけたらと思います。



谷口未央監督

谷口未央監督『長浜』・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

わたしは2012年の本映画祭のコンペティション短編部門（仇討ち）が初めての参加で、2回目が長編部門（彦とヴェガ）でグランプリをいただき、この映画祭に育ててもらったと思っています。『長浜』では名古屋と縁のある秀吉が初めて自分の城を持った今浜城、今の長浜城の城下町で作った豪華絢爛のお祭り、400年以上愛されている「長浜曳山祭」を題材にしています。ドキュメンタリーではなくドラマとして撮りたいと思い、9年間試行錯誤しながらようやく本映画祭で発表することになりました。この映画では「伝統文化と多様性の邂逅」としてお祭りという伝統文化の中で多様性がどう受け入れられるのか、反発されるのかを描きました。



ハ・ミョンミ監督

ハ・ミョンミ監督『済州島三・四事件 ハラン』・・・・・・・・・・・・・・・・

この映画は1948年の「済州島三・四事件」（朝鮮半島の南北分断を契機に政府による無差別武力鎮圧が起きた事件）を題材としています。そこで事件に巻き込まれた幼い娘を守る母親を主人公に、済州島女性の強さを描きました。韓国の上映時間は118分ですが、今回の日本での上映は128分のディレクターズ・カット版です。日本で一般公開される時は是非128分版で上映していただけることを願います。



ヤン・ヨンヒ
プロデューサー

ヤン・ヨンヒ プロデューサー

予算の厳しい環境の中で作った作品ですが、真摯な姿勢、登場する人物たちのメッセージや気持ちが伝わることを祈ります。映画が持つ感動をみなさんと分かち合いたいと思います。

キム・ヒャンギ（俳優）

美しい済州島の自然とそこに住んでいた人々の姿を観てほしいと思います。



キム・ヒャンギ

編集部記者の試写会レポート

次ページでは編集部記者が取材した「金子文子 何が私をこうさせたか」、「映画はアリスから始まった」、「繕い裁つ人」の3本についてのトークショーと映画の鑑賞記録を掲載。

浜野佐知監督作品『金子文子 何が私をこうさせたか』（映画祭オープニング作品）

本作は実在の人物をモデルにしている。浜野監督は1988年に復刊された金子文子獄中手記『何が私をこうさせたか』を一読し文子の怒りや絶望が自身の中に飛び込んだ。日本という国に対する差別に反逆した姿が、女は映画監督になれないという、女性に門を閉じた日本映画会で受けた差別に抗いながら作品を作り続けていた自身と重なり、「金子文子は私が撮る」と企画をスタートさせた。映画は浜野監督の文子に対する時代を超えた同志としての熱量が伝わってきた。

そして金子文子を体当たりで演じた俳優菜葉菜。浜野監督作品と何度かタッグを組んでいるが、「金子文子を演じられるのは彼女しかいない」という監督からの信頼のもと、文子の魂が乗り移ったかのような迫真の演技で応えていた。

本作品には9月2日に亡くなった名優吉行和子が文子の祖母役で出演。撮影は昨年だったのだが体調が悪い中でもカメラの前に立った吉行和子の演技には鬼気迫るものがあった。0号試写会に吉行さんが来られないと知った監督は、急遽DVDを送り観てもらえることができたそうだ。浜野監督は自身を追ったドキュメンタリー番組でナレーションを務めた吉行さんのラストカットの言葉が今も忘れられないという。「浜野監督、次は何を撮りますか」を支えに今後も撮り続けると言う。



浜野佐知監督(左)と菜葉菜さん



ドキュメンタリー『映画はアリスから始まった』（30回記念特別企画）



映画はフランスのリュミエール兄弟がシネマトグラフを発明したことから生まれた。当初はその装置を使ったカメラマンたちが世界中でいろんな動くものを記録し、それを上映していた。それを観たアリス・ギイという女性が装置の動かし方を修得し映画を作るようになる。しかも、それまで誰もやらなかったストーリーのある寸劇映画を作り評判となる。やがて結婚して夫とアメリカに渡りそこでも次々に作品を生み出すアリスだが、事業に失敗し、こどもを連れフランスに戻る。だがすでに故郷には居場所がなく、自分が制作した映画は他の映画監督の作品として全て塗り替えられていた。そしてアリスは世界初のストーリー映画を作った監督としての存在を映画界の歴史から消され、人々から忘れ去られていった。

本作ではそのアリスの存在を証明するためにアリスの孫やひ孫を探し出し、その証となるものを追求するシーンがすさまじい情報量と目まぐるしい展開で紹介されて行く。現存していたフィルムにはカビが生えていたり破損したものが多かったが、現在の技術で次々と蘇らせる場面は圧巻であり、アリスの存在が蘇る瞬間であった。

気がつくと思写会場の二つ隣の座席から啜り泣きが聞こえてきた。終演後、失礼ながら声をかけてみた。その方は昨日の記者会見で登壇していた谷口未央監督（出品作『長浜』）であった。訊いてみると「アリスの存在が証明された場面に今回いっしょの女性監督たちが重なって涙が止まらなくなった」とのこと。9月12日現在、谷口監督の『長浜』はまだ一般上映は未定だという。アリスに涙した真摯な映画監督からの一般上映の報告が入るのが待ち遠しい。



女性映画監督の先駆者
アリス・ギイ（イメージ）

三島有紀子監督作品『繕い裁つ人』（特別上映・2015年作品）

三島監督は阪神大震災後にこの映画の基本構想を企画。三島監督の祖父がオーダーメイドしか着ない人だったことがきっかけで、洋裁店を舞台にした内容と車椅子の花嫁のウエディングドレスというイメージがあった。しかし内容が地味だと映画会社から敬遠され続ける。あるとき知人からこの映画の原作となる漫画を紹介され、その漫画家に相談することで形として動き始める。そしてダメ元で主演として中谷美紀に会いに行き映画の趣旨を説明し、理解を得ることができた。さらに中谷から本作で衣装監督となる伊藤佐智子を紹介してもらい作品が走り出す。低予算のため映画作りには多くの障害があったが、アイデアや多くの協力者により、美しい映像を生み出すことができた。記者が上映中にずっと疑問だったことがある。神戸が舞台の映画なのに登場人物が誰1人として関西弁を使わないのだ。しかし、映画の世界に入り込むとそんな些細なことは忘れていた。上映後のトークショーで三島監督が言った「この映画は生活感のない映画にしたかった」で疑問は霧散した。この映画はファンタジーに溢れた世界を魅せてくれていたのだ。



三島有紀子監督



「第30回 あいち国際女性映画祭2025」は9月15日に盛況のうちに閉幕。今回の女性監督の皆さんの今後の活躍と、来年もまた素晴らしい作品に出会えることを願って。（映画祭レポート／たそがれ movie ウォッチャー・鯨）